

13  
1833  
57



繪本古圖の扇巻五

目録

佐々成政破一揆活

日國

飯田角兵衛多右衛門

佐々成政生害之活

殿下石田三成を以て佐々成政礼回の國

黒百合殿上りの國

北政不茶余の養進殿之活

殿下殿を以て後女を遣入國

真面目に五世目録

政不茶會 殿と御食以圖  
皇百合 賦 佐之活

日圖

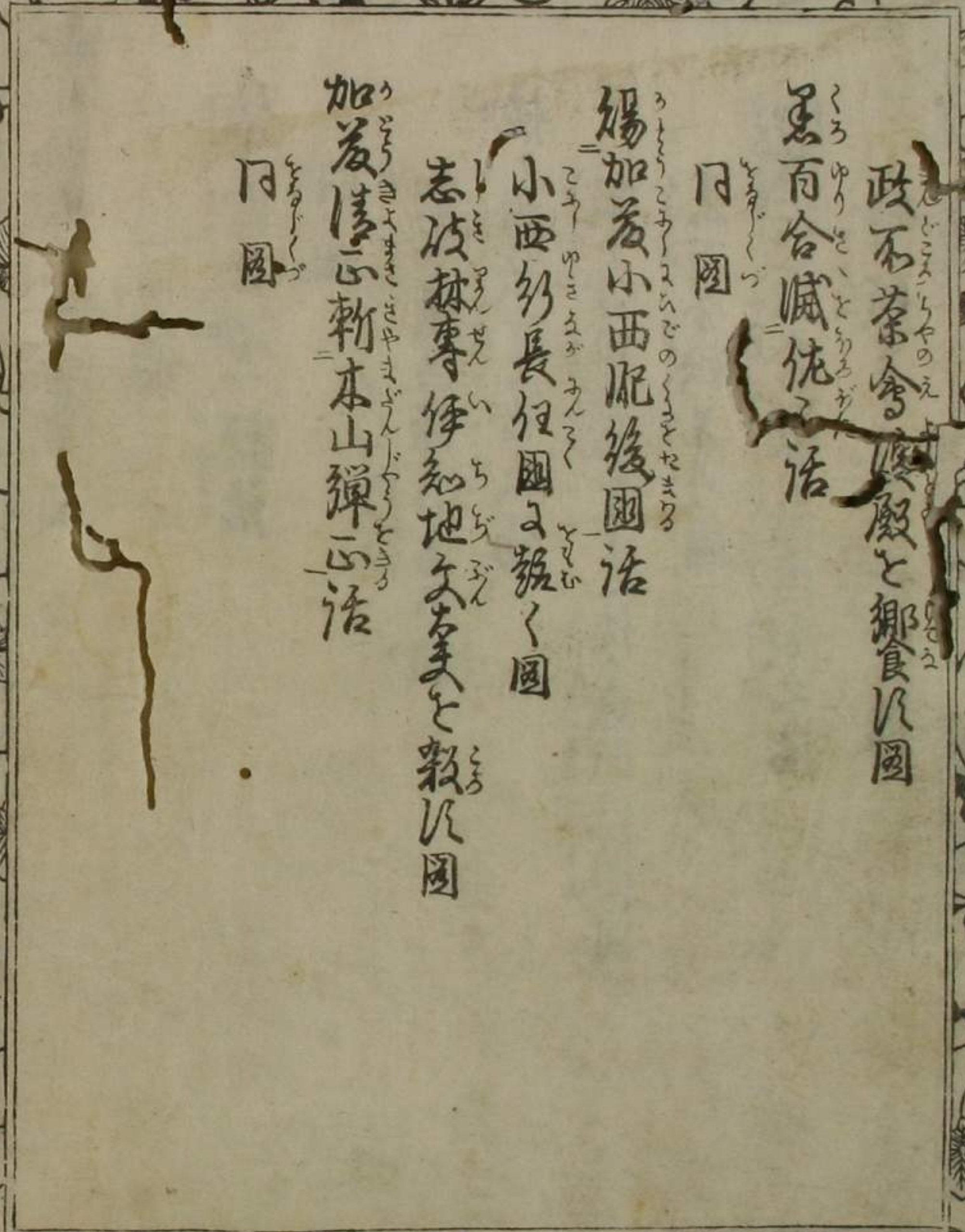
賜加着 小西肥後國活

小西外長 但國又強く國

志波林 專侍知地文を美と教以圖

加着 佐之助 本山 彈正 活

日圖



繪本左圖記五篇卷之九

佐之助 成政 破一揆

兵の勝を以て功と見たりと軍將も人者心割み命と輕くその捨死を  
論せしむるに其の戦ひ勝と勇將とを以て佐之助と成政の殊勇を  
其の者なりと見たりと其の時限部の城を以て城外を巡りて其の城に對し可  
乃高山あり成政諸士に向ひて此山欽と云ふに其の勇く後味方の難哉  
かり欽のさうと先陣と布やと珍本表一即久瀬又助も又百餘人乃  
兵を督し急げしと其の知れしに珍本久瀬長り勢と引く馳しに  
先立て欽山上にありて其の強砲と打ちけ大石を投じ上りて其の防ぎに  
佐之助軍勢二千餘計を討てに其の久瀬珍本も其の討てに先  
其の士乘進勵し切し難く山上の欽を退落し後又彼山を





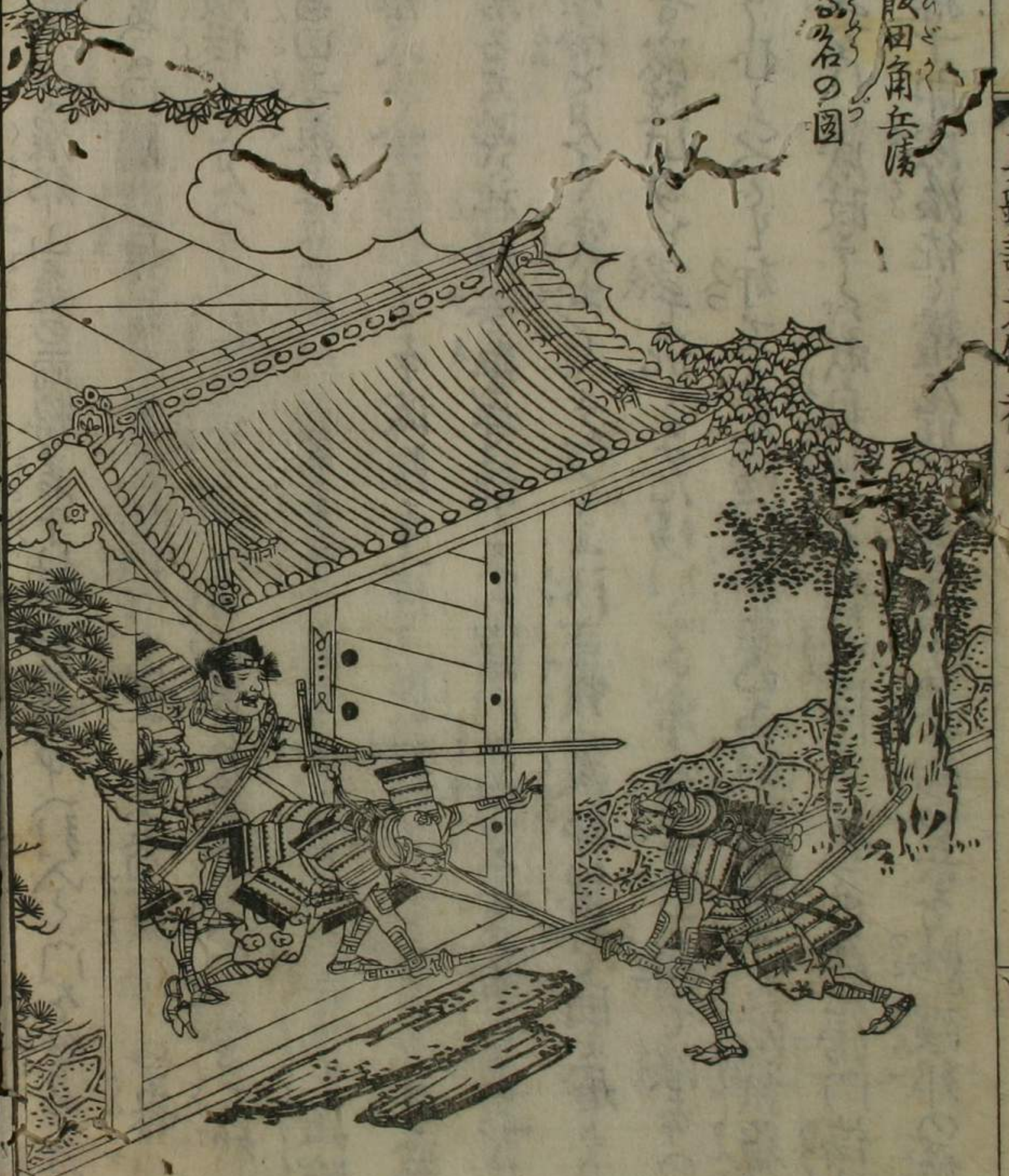
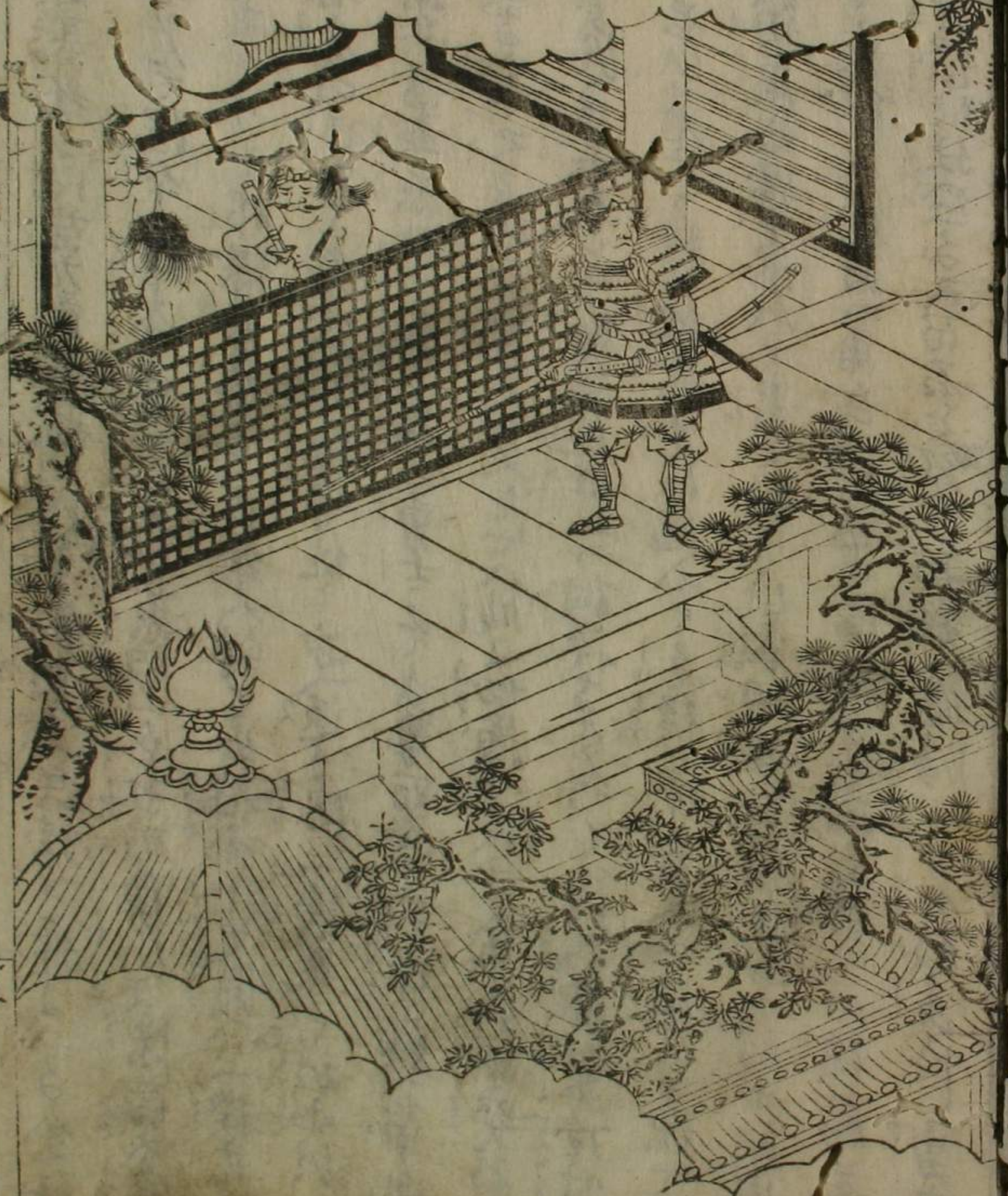
國が破る  
一援と  
倭の政

上野國

妻たる成政今以後に事なきは只一尉の城を奪ふては方なりせむ  
 一に個馬守が嫡子隈部七系親安とて若山麻の城を籠りしに  
 又軍心えらく二系余誘を引置隈部の城へ後遣とは成政を陣裏  
 一文字に切入り城中よりこれとてかく捕て討て成政をりしに又城  
 を用ひて突入り依り勢義後の敵に逢と失い隊伍乱とてえに  
 成政大別普通の者之れはらりも強が長冬之組とて故信長も  
 好し出で給ひる刃のまうり三又余りの刀に二又余の柄と毛御糸にて  
 之鞘はしれ符又負る兵士百余人旗を勢の元に進ませ下知し  
 様の尉よせんといふ必死とて死んと思ひ却て生る者なりと討死  
 思ひ定め刀の刃のつらん殺死狂ひせよと若者たと大者も  
 會釈もろく切金に是れを得ては方へ教し依り軍兵政をせし

戦ふ隈部山麻の両勢若于討し皆城中へ引入り門を堅めて防ぎ  
 安は日圓舟舟の城を甲斐相模と宗とて一者一旦依りの幕下に属  
 腹後して口々ろろが忽叛逆を企て菊池香右衛門小代下総と大智を後  
 畠田安藏守其外河藏の太官司とてい國中の一揆系と近隣  
 勢八系余誘依り本城隈部を遣し世に播りりて妻たりる城は止り  
 居る大尉の神保安藝守依り本城隈部を遣し世に播りりて妻たりる城は止り  
 場合とて今々突出くえんぐは防ぎ戦ふ隈部の城と囲居る陸奥  
 守成政はのちて依り本城隈部を遣し世に播りりて妻たりる城は止り  
 せむとて之れを却てよ本城隈部を遣し世に播りりて妻たりる城は止り  
 安は成政より我自給とてい叶はしと長子居本城隈部を遣し世に播りりて妻たりる城は止り  
 孫十郎成治依り權左衛門守より二系余誘の兵を陸隈部の城と押

飯田角兵衛  
の  
名  
の  
圖



至其身は日向九郎右衛門後守飯田角兵衛等僅に二子余孫探  
はかして隈本(近)に二揆の陣茶臼山を打破勢ひは際(際)に突(突)き  
城中より北保妻(保)を討て二子余孫討て出陣合して戦(戦)ひ一揆(一)討(討)る  
者麻の(麻)を破(破)小代下総守佐(佐)方(方)返(返)り(返)り一揆(一)悉(悉)く破(破)小代飯田  
角兵衛(角)由(由)原(原)の(の)方(方)を(を)討(討)つ(つ)る(る)勇(勇)士(士)を(を)討(討)つ(つ)る(る)勢(勢)百(百)余(余)人(人)討(討)陣(陣)飯(飯)田(田)相(相)  
摸(摸)宗(宗)之(之)が(が)旗(旗)を(を)一(一)万(万)人(人)と(と)七(七)八(八)切(切)崩(崩)し(し)八(八)十(十)余(余)人(人)討(討)死(死)を(を)討(討)  
り(り)の(の)士(士)卒(卒)と(と)下(下)郎(郎)と(と)馳(馳)走(走)り(り)相(相)撞(撞)ぎ(ぎ)互(互)に(に)破(破)陣(陣)不(不)論(論)叶(叶)は(は)ど  
や(や)あ(あ)い(い)ん(ん)が(が)村(村)の(の)地(地)を(を)事(事)に(に)延(延)入(入)る(る)後(後)二(二)千(千)余(余)人(人)切(切)腹(腹)し(し)死(死)す(す)る(る)  
飯田角兵衛(飯)を(を)入(入)る(る)首(首)と(と)し(し)て(て)飯(飯)田(田)角(角)兵(兵)衛(衛)大(大)和(和)の(の)侍(侍)士(士)飯(飯)田(田)出(出)羽(羽)  
守(守)を(を)以(以)て(て)成(成)政(政)の(の)角(角)兵(兵)衛(衛)が(が)母(母)方(方)の(の)後(後)守(守)之(之)成(成)政(政)滅(滅)亡(亡)の(の)後(後)に(に)加(加)藤(藤)貞(貞)斗(斗)  
既(既)に(に)仕(仕)へ(へ)る(る)又(又)石(石)と(と)鉄(鉄)の(の)解(解)脱(脱)後(後)海(海)を(を)名(名)敷(敷)多(多)に(に)勇(勇)士(士)たり

うり(う)り(う)の(の)隈(隈)守(守)の(の)城(城)を(を)守(守)り(り)て(て)又(又)隈(隈)部(部)と(と)美(美)尾(尾)比(比)と(と)を(を)隈(隈)守(守)る(る)  
城(城)を(を)回(回)る(る)も(も)ち(ち)せ(せ)自(自)身(身)隈(隈)部(部)の(の)城(城)に(に)押(押)寄(寄)り(り)兵(兵)急(急)に(に)走(走)り(り)て(て)隈(隈)部(部)  
佃(佃)馬(馬)守(守)を(を)籠(籠)城(城)に(に)い(い)て(て)降(降)参(参)して(して)城(城)と(と)成(成)政(政)と(と)後(後)守(守)の(の)城(城)を(を)居(居)  
し(し)て(て)又(又)隈(隈)部(部)中(中)に(に)留(留)り(り)て(て)成(成)政(政)軍(軍)勢(勢)と(と)争(争)ひ(ひ)合(合)つ(つ)る(る)陣(陣)を(を)下(下)り(り)て(て)強(強)  
勅(勅)大(大)坂(坂)表(表)に(に)あ(あ)ら(ら)わ(わ)る(る)秀(秀)吉(吉)の(の)御(御)下(下)知(知)し(し)て(て)新(新)野(野)強(強)心(心)お(お)弼(弼)永(永)昌(昌)肥(肥)後(後)に(に)  
向(向)く(く)國(國)中(中)の(の)政(政)を(を)一(一)揆(揆)の(の)形(形)勢(勢)巡(巡)見(見)し(し)て(て)小(小)倉(倉)又(又)國(國)中(中)平(平)均(均)の(の)体(体)を(を)い(い)か  
其(其)隈(隈)大(大)坂(坂)城(城)に(に)あ(あ)ら(ら)わ(わ)る(る)也(也)  
佐(佐)成(成)政(政)生(生)喜(喜)  
そ(そ)の(の)年(年)に(に)名(名)義(義)果(果)る(る)に(に)天(天)正(正)十(十)六(六)年(年)の(の)春(春)佐(佐)成(成)政(政)守(守)成(成)政(政)後(後)  
一(一)揆(揆)の(の)形(形)勢(勢)を(を)始(始)め(め)て(て)演(演)説(説)の(の)形(形)と(と)用(用)意(意)を(を)示(示)す(す)る(る)小(小)倉(倉)守(守)成(成)政(政)を(を)一(一)  
揆(揆)の(の)形(形)勢(勢)を(を)教(教)ま(ま)わ(わ)り(り)て(て)政(政)を(を)治(治)る(る)者(者)を(を)い(い)か(か)る(る)が(が)彼(彼)を(を)制(制)し(し)て(て)懐(懐)け



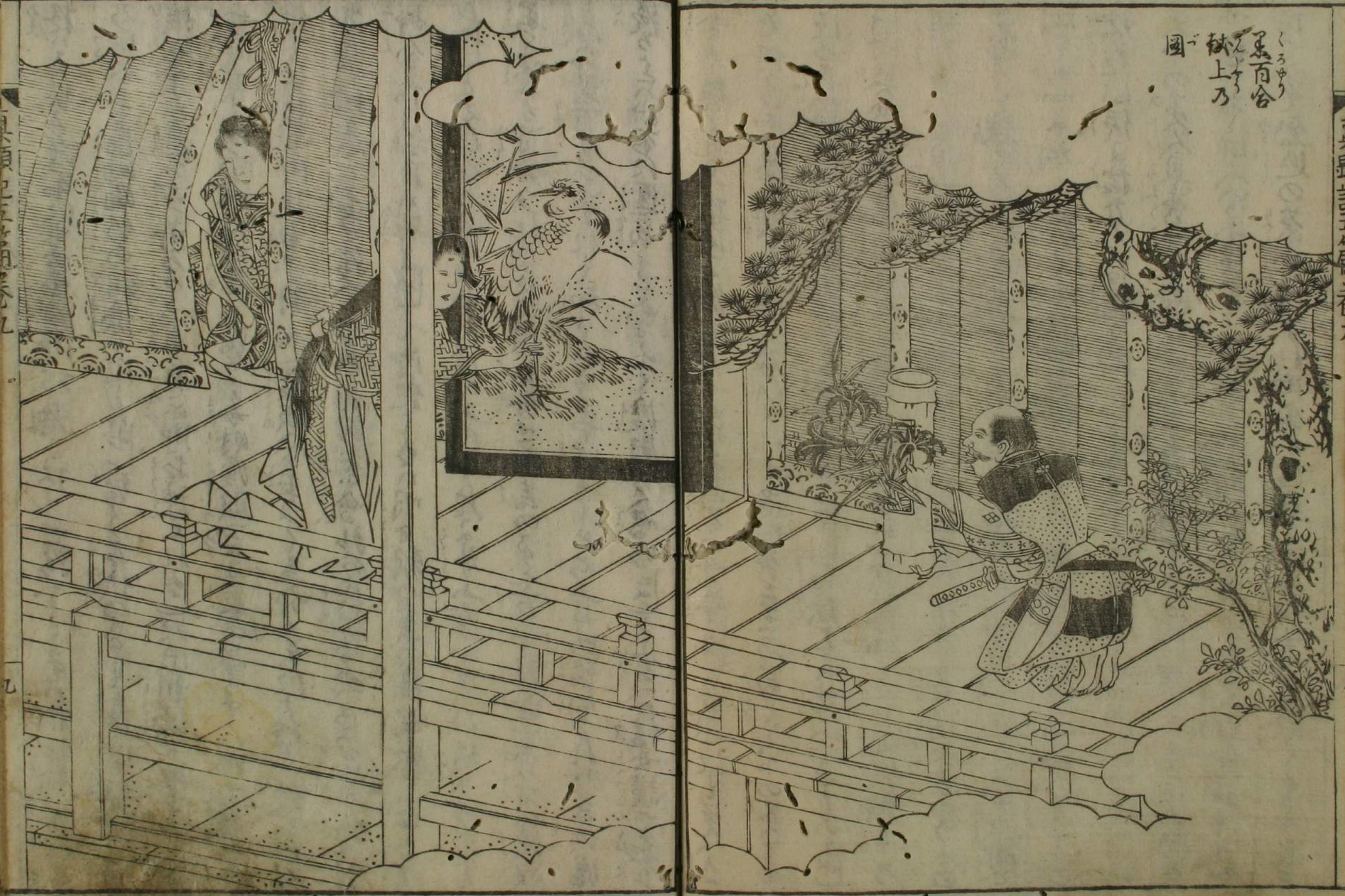
殿下  
 石田三成と  
 多佐  
 政  
 丸岡の  
 園

真蹟記五箇卷九



卯に月廿八日とふに肥後國を脱し一月又日抄に尼崎に居るに  
以て其時秀吉の御意に其意を大坂城の役をお止らる  
田沼郡少輔三成を尼崎に留し其依り成政と其弟の國中乃一按  
子回お背りも仁意の政乃を以て極活し其きも新に入部せし大國及び  
て殺罰多し仁心これ方く且耶蘇宗門を以て依りたるのよしと其に背り  
の衆甚多其懐中用き多し其以て自害と云きはし其命を成政に  
與て其心腹の者かりたるに理は屈して其の善し方く又月九日尼が  
勝とて勝切て死する時又十一歳之成政秘に肥後と申し賜ひる其  
に替り其の誤りに死と賜ひしりし又不忠のゆゑに其や其の  
右の國中左右の才女より起りし之依り成政肥後に入國し其  
るを按りたる小秋これおとれた大國を以て榮耀に勝るるを

令く奥より乃其成は依てかり其政不忠其心は我心に其  
を何なる御意を附と云きと其いひたりと其御意を云乃其天下の兵と  
は其御意に其の物と云とも其是らるる一命と云はるるの由  
け耐奥女中只茶室のものと其扱ふ耐其れは成政佐と心付向成中乃  
地より其白山大女山の山子籠に連りたる其難の地は其花咲百合ありこの  
其ゆりを探て大竹を其水を其其中に其百合を生け其其り乃其脚と  
以て急を其を其れは其の政不忠とて其政不忠の其恨み其の余りの  
其其れは其其れは其其の情を其れは其其れは其其れは其其れは其  
天下の兵人其其才と耐其きて秀吉の御意に其に勝りたる後殿に  
其其れは其其れは其其の其所に其其れは其其れは其其れは其其れは其  
以て其其れは其茶會に其御意に其後殿と其榮尼を其れは其其れは其



くろやう  
屋百合  
秋上乃  
國

新編言海

極むる政不仁茶の御巧者よりせ落ども其の相の弥紹路  
乃極くて尚耐流の利体が凡といひ習う古代の事も多し故利体  
娘は亦る者をして御座るの元合せ御お造りしに利体が娘の今百  
舌を某とてその町人の妻とあり毎時後殿(石)真の基子唐物まき乃  
傳り皆後女御指前中別して後殿(心)まきまき乃にゆくと政不仁  
忠のけ後まきとまき後人も今度の茶会外に召給ふべき茶の巧者の  
婦人よりこれに密にゆくと御札とあり明日朝の茶の湯後殿と密に法  
定しとみひぬといふ方の見はくろひしは又斗ふに(石)まき後入乃花を  
まき後る百合のいれは其の元合せ勘美のゆえ古今勝進(秀)才の後殿  
とまき後百合のいれも知るところやまき(石)まき斗の銀向るに茶乃湯  
後れといはれたるに返していれまき後殿方へ(石)まきはと宣へ後女謹んで  
極むる政不仁茶の御巧者よりせ落ども其の相の弥紹路

極むる政不仁茶の御巧者よりせ落ども其の相の弥紹路  
乃極くて尚耐流の利体が凡といひ習う古代の事も多し故利体  
娘は亦る者をして御座るの元合せ御お造りしに利体が娘の今百  
舌を某とてその町人の妻とあり毎時後殿(石)真の基子唐物まき乃  
傳り皆後女御指前中別して後殿(心)まきまき乃にゆくと政不仁  
忠のけ後まきとまき後人も今度の茶会外に召給ふべき茶の巧者の  
婦人よりこれに密にゆくと御札とあり明日朝の茶の湯後殿と密に法  
定しとみひぬといふ方の見はくろひしは又斗ふに(石)まき後入乃花を  
まき後る百合のいれは其の元合せ勘美のゆえ古今勝進(秀)才の後殿  
とまき後百合のいれも知るところやまき(石)まき斗の銀向るに茶乃湯  
後れといはれたるに返していれまき後殿方へ(石)まきはと宣へ後女謹んで  
極むる政不仁茶の御巧者よりせ落ども其の相の弥紹路  
乃極くて尚耐流の利体が凡といひ習う古代の事も多し故利体  
娘は亦る者をして御座るの元合せ御お造りしに利体が娘の今百  
舌を某とてその町人の妻とあり毎時後殿(石)真の基子唐物まき乃  
傳り皆後女御指前中別して後殿(心)まきまき乃にゆくと政不仁  
忠のけ後まきとまき後人も今度の茶会外に召給ふべき茶の巧者の  
婦人よりこれに密にゆくと御札とあり明日朝の茶の湯後殿と密に法  
定しとみひぬといふ方の見はくろひしは又斗ふに(石)まき後入乃花を  
まき後る百合のいれは其の元合せ勘美のゆえ古今勝進(秀)才の後殿  
とまき後百合のいれも知るところやまき(石)まき斗の銀向るに茶乃湯  
後れといはれたるに返していれまき後殿方へ(石)まきはと宣へ後女謹んで  
極むる政不仁茶の御巧者よりせ落ども其の相の弥紹路

中より心とあしくいり又御加子の坊より方々を尋ねて  
し下さま乃のりよと様方の御料理より中へ茶乃の背き  
たけ二膳を茶乃と夕飯の宴に御習わすに夕飯のりよ  
の若も終いて終る茶乃方より御料理にお入り即ち心持こそ出流  
乃茶乃のりよと恐入て中より政所大に感とせ終ひ宴に利休  
が息女方よりりよよきと指圖いさるをきとて諸の綾女は世に  
まひ奥の居間よぞ入らせ終ふ

小政所茶會餐應は殿

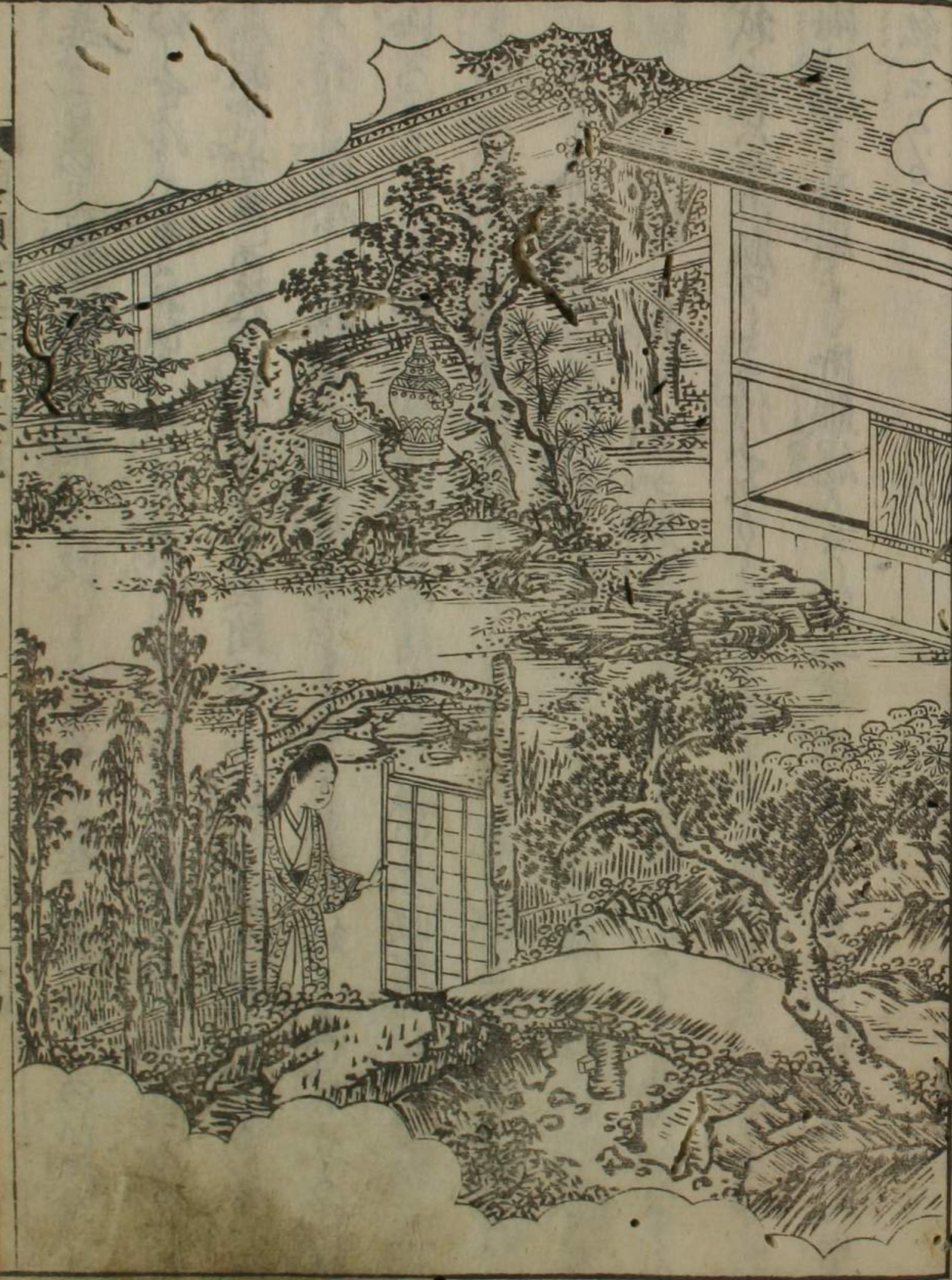
此時殿下茶をさうりて政所の御殿へ入らせ終ひ何事なく次の御  
間へ来り終ふは利休の娘も茶をさのぬりせ終ふを初り此茶會  
の下膳は坊よりりよ小茶をさ良きとて後三居終ひしが石舟  
河心やうりえ綾女が袴やうりてまきいふ利休の娘は十三歳乃時  
細帯と腰は挿と我茶に茶と長きりし世中茶茶種押ししろき  
し乃のりよとやせしが今百舌を妻とめり妻膝き其中つて  
茶に勝る面白きものいさきうと初終ふ綾女といひけり殿下の湯  
大きに湯き花のきて平伏とて入道く奉仕と帝の端とて引せ終ふ  
綾乃のりよとて迎初と茶をさい捕へんと宴被方追白り終ふ乃のりよ  
女中よりゆりゆり終りて綾乃長極より茶をさて廣屋は飛下り山吹と湯  
楓を巡り中へ入らせ終ひの書院先へ迎込より茶をさり後殿は心  
せ終ひ續てり追せ終りてお笑ひくゆり終ひ女系けりをゆは終  
るに終りて御殿へゆり終ひる此時後殿の綾女と近くして今の始終  
と終りて茶の師といふ人妻のりよ自が茶の師といひ我とよ乃のりよ



殿下  
 殿  
 後  
 遊  
 遊  
 遊

おひよりの膝をたれた人若し只母とこそ物を糸くひるとゆけども  
後身はあつくと難ぬ唯いとふく流と流との外は「後殿をてゆら  
る明日政所の茶湯の定めて自りよとせ給らん河工とゆら  
むしを海かへ誰人か我と膝を助くなき河の郷のあは「語り  
給とあつれば後女御面ととげ政所様は何の河工よりなき只「中  
睦とくうんおとく教書のるよは「ませば河拓き給らるくの外  
他とたれば「とすれといやくとそれゆらにこそ定めて政所より自  
言は「そと口とあつら「とすらん我のあは「まゝありて未多し経  
よ多若き河の恥と蒙らるゆらる河師の申して刃捨ゆらんとい  
ていおひ知ら「しそやと或の恨と或の遠「常若と戯てか「ゆら  
後身はあつと心解けは「やけ「とて命とあふとて「此河言茶と争

背き申してと後身百合のゆをこまぐと物語り我よりあせ給る  
男と給自「とやうる小後殿と「拜してたに「と自指を嚙を  
奥を押して他をせは「と乃誓いとほ「とや「山の殿「ゆ「せ給と人  
を附て又廣座より密に送り給らる政所より此村に奥殿より給  
る「給女とまゝと「給らるて河次の間と「ゆら「後殿の百合の  
ゆは給らる「と速腹心の若し給らる「被白山の黒百合と「ゆら  
して小園を「と根茶の湯の冠限を「居給るや「とゆら「河  
茶の知「せは「ぬと「後殿に「室尾符合に「入給らるて政所を「向て「圍  
「接投「給らる「和ら「角あり心付らる小「給らる「皆「合「双方  
「後殿の「中「と「後入の「被白山乃「黒百合の「花「ゆら  
「後殿の「と「給らる小園の「花「都の人乃「と「難き「



三  
改附の茶會  
・後殿を  
餐を  
圖

葛野言五篇卷九

廿

妾が二生の見始りて見納にも以てとて茶の巻く首尾そのい渡殿の  
 御をせ給ふまはれいり利休が娘御側の女中多政所の御前出御茶前  
 尾渡御出速の夜を接扱中する政所にも御機嫌よく扱はるの夕渡殿  
 乃種々縁巻一給ひの儀是れどもさびり委しく知るるまき中うはは  
 母多かりしにぬるやと伺ひ給ふは時後女は渡殿の惣政所の情状をいひ  
 ちちの御禮の奉の次第と詳しやと自白して死と云ふことども殿下れ  
 ころり河内給の政所へ取入るるを思ひ中難くはむむいり包こ  
 難くまに心十番にさるるが免角にその依り成政が方より偏り物るる  
 我々の只此御殿のとも侍ありしはき間もこれにとて産ませてもお  
 海渡女も首尾よく御取扱らるる女中婢女少うして只いそくく  
 私を云々の

悪百合減佐々

此以敷下秀若云洛東清水寺に宿給ふとて例乃寛間御供の風流若  
 菜と云ふ侍者卒氏の老い車りのころとて洛中洛外のまじ道徳のま  
 見物も物々々々接扱をいひ屏障を立方へ振りまきうへんこは  
 儀之局の女中達も今度の御儀より外なるか面目を失ふと云ふ  
 御云釈わしが御供をゆりし給れとてあつぬ信心と面は取れぬ  
 水を書き置るるもありて代糸と云ふ御供せんといふるもあり  
 三女房達の役欲水男の秋のころとて怖畏軍陣の供るる給はれ  
 懼りし給えし給えし給えし給えし給えし給えし給えし給えし給えし  
 廻廊は書置符をうけ兼て時をさるるにさるる殿下は摘花と御儀  
 政所とも石をさるる被回廊の同は歩とめがし憎く心を願は給ふ







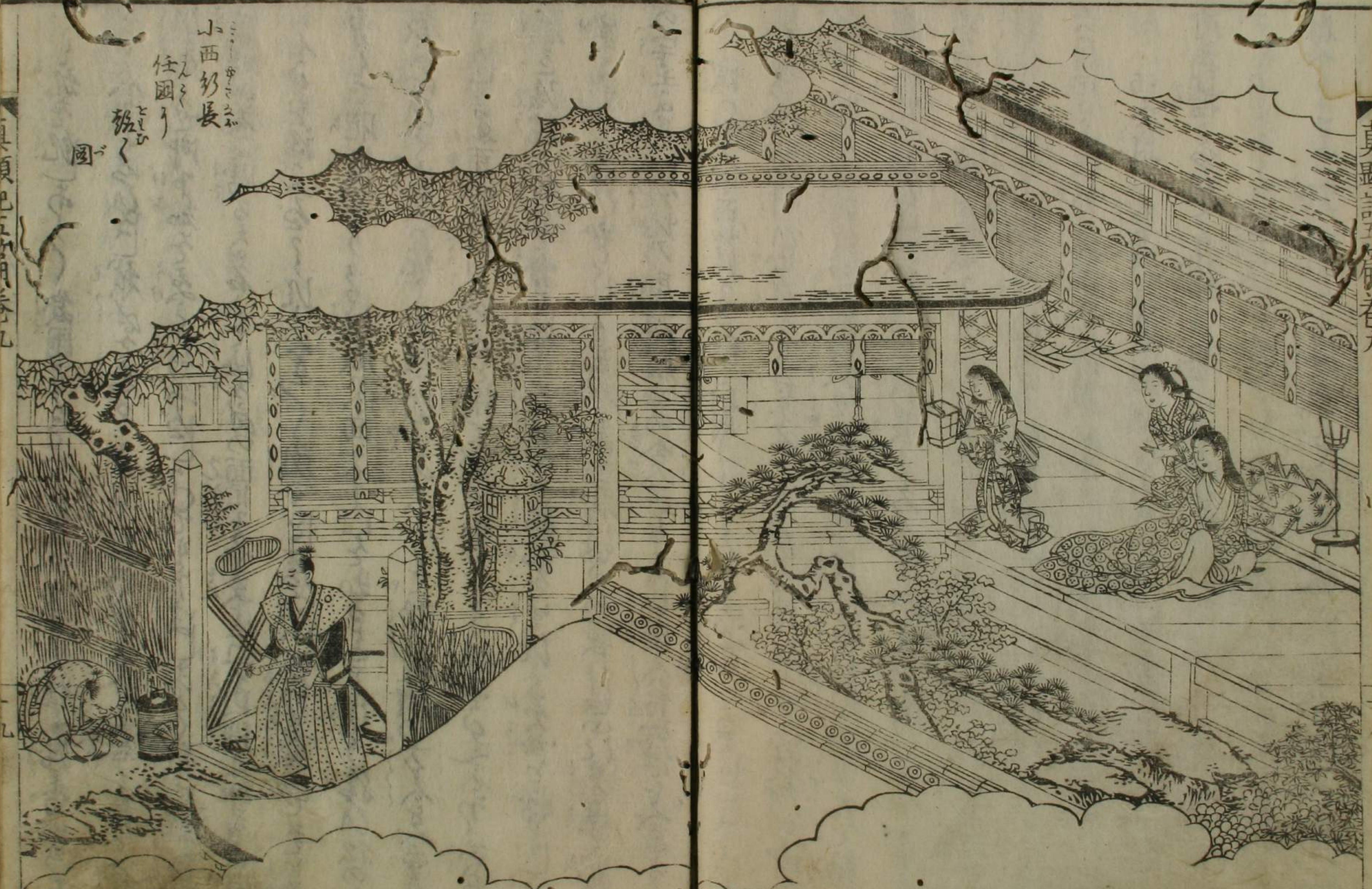
大将乃西ニケイヨ

百合  
花  
園



真蹟記五卷九

小西初長  
任國  
國



真蹟記五卷九

此を既しあへて教團方よりやをよく水を膳し海香山乃あ  
 りて人をたふしは「我ををたふすれ何ゆりてり悉く殿中を親  
 ひ弟しせ御中知をたふすれ何ゆりてり悉く殿中を親  
 代の附加は勝るる名こそはが方の面目をたまよつ内瑞み加ふ勝  
 らんを承ふるるはとをく教へては小西勢長儀でよと承  
 勇んで肥後へりりる後殿小西が中門を出ると見送り孫ひ松の丸  
 殿の御ひく宣ふの儀は成政の劉勇の大名をて勤政所の方人よと  
 方りしが是百合の針入のふと備て殺しぬるいふはきりてり  
 教を陸院と教を合し深山大沢必と龍蛇を生じと勇母と勝し解  
 実よりしとひ出られらるるは小西勢長儀は先達て肥後  
 の宇土よと「此地乃郡村」殿中の命令と中し國人皆出はとよき  
 若る小西が飲内天草志波林の天草修守日長門守の勇武り  
 誇り小西が命と用ひは後者よ對してやとて我がゆい先の國を  
 成政と事論し頗合我よ及びり」よ秀あるはけ方の中を方り  
 く成政は切腹儀はとてりたあれは我く殿中事系の御教へとぞ  
 けははと堰の業種店に甘草居「皇子よ勝をくめて出はとよ  
 を勇名天下にばし一統にばし我一族小勝中知を承ふれ  
 小西の志を承れと中し志波乃といふ小計をばしと傍若無人の返答  
 但者と追まはしとるされに例して國中の諸士一人も出はとる者  
 割志波林の二探系と近集れを勢あるは百余人天草志波の城にた  
 籠叛逆の志は然りたる小西勢長の後殿の儀を承り奉と堪へ河と  
 しては扱ふと承り既し奉定よとり止のちく又馬と承て秀ある

真蹟言五篇卷九



志波林亭  
作知地文  
圖之 穀 凡

真景言五篇卷九







加茂清正  
本山後  
斬る國



打者さし耐ふれど元来天竺の鉄炮は名譽のあらざる  
 得乃るは玉の徳習ふこと乃好むる地國の如くはさしは  
 是に勢た難兵ども入り来ると毎に法正が先を亂し發きて月々  
 多り法正は是と見ても大きに怒り齒とくも鳴り着敷十町へ御まき發射  
 しまに玉のあり迎る味方を鹿目みんく十文字の槍に引せり  
 くともつる夢血涙軍乃耳に徹く壯氣絶然と面より力足と踏  
 進るに始終敵く不知はとくも威風凛々ならん熱軍を  
 法正は之に法正天竺修守が陣より向く一たび槍を動かすに  
 是れを法正七八法正殺し法正が陣中震い怖ときてさく  
 り引退く法正續て喚き道へ備本坂馳とる小本山法正世に發  
 び大筒と馬といふまゝ門へ小まき法正と見ると法正先を引けて天竺

大おや名は何と申はぞ本山法正といは加茂殿と見まはさしは  
 中より法正をとりては花を奪ひは真とては槍にくまはさしは  
 真法とやさんともは法正鉄炮とらりと捨る方の槍といふとを  
 鳴しとて坂と一坂とびりて突てう法正十文字の槍とめて  
 是れと突合はる山西海普通の大かたは法正が槍とちのて  
 ともとげ飛遠て突んとは法正もさつとつ別勇るれは金剛力と  
 叩く喚き叫で突合はる木の樹本動揺る山鳴聲き林多ぶ枝  
 ちりた碎け花でりる肴肝を奪ひしは忽ち之撃電光ひつりき  
 飛りあつて是れ法正乃十文字行種うけてお花を法正はさしは  
 奪うけく顔工のち打りては法正いづくしうろと澄と踏まじく馬

討ふ内甲より咽喉をうけく切ぎげ踏倒して後より首と討ふる毛  
とんく本山を勢えんぐよ丸まき受りちかく級ゆい清ぶ捨る志津  
乃他とて三月月初の十五夜にしよけ我々突おて行謙とそあけ  
と後までしそすしちくおきたるそ大海なる又と捨い元佛本坂乃  
津宮へ納せしよ今も夜靈異ありて應候とけり若け宮へ清の  
捨の絹乃熊の毛と一筋ぬきて守とるをば忽ち應乃抄らぬは  
そ因乃入るにや修ふ

繪本右図記五篇卷之九終

